

Can't Stop Fall in Love 3

## もくじ

Can't Stop Fall in Love 3 5

番外編  
腹黒王子の一年計画 251

Can't Stop Fall in Love 3

プロローグ 晴れのよき日に

よく晴れた、とある日曜の午後。

白亜のチャペルの前に並んだ人々は、色とりどりの花びらを手に本日の主役を待ちわびていた。やがて大きな木目の扉が開かれ、真っ白い衣装に身を包んだ新郎新婦が現れる。

つい先ほど、神様の前で永遠の愛を誓った二人は、大勢の列席者の視線も気にせず見つめ合っていた。

「おめでとー！」

「おめでとー！おめでとうございます！お幸せに！」

降り注ぐフラワーシャワーの中を、満面の笑みを浮かべた二人がゆつくりと進んでいく。

「——おめでとー、お兄ちゃん！沙紀さん！」

私も、両手いっぱい抱えた花びらを、天高く放り投げた。

でっかい婚約指輪が止まっている、その手で……

私は、羽田野美月、二十三歳。

今年の春に大学を卒業、株式会社SUZAKI商事に入社して間もなく一年が経とうとしている。そして今日は、かねてより婚約中だった兄の結婚式。

兄と沙紀さんの結婚式は雲ひとつない好天に恵まれた。一軒家を貸し切りにした会場で行われるガーデンウェディング。二人の友人はもちろん、父の知り合いや仕事上の関係者も多数出席して、それはそれは盛大なものになった。

「今日の式、羽田野家の来賓がほとんどじゃない？美月の時もこれくらいの人数になるとすれば……残念ながら美月が望むような『ささやか』な式は挙げられそうにないね」

私の隣に立つ彼——須崎輝翔さんは、披露宴の様子を眺めながらやけにニヤニヤしている。

「今日の式の参列者が百人。俺たちの結婚式で予想されるのは五百人。そう大差ないんじゃない？」  
「……どこですか」

今日の式がこれほど大規模になったのは、兄が父の事務所の跡取り息子だからだ。嫁に出る私の時は、こんなに大規模になるわけじゃない。

私の希望は、親族とごく親しい友人たちだけを招いた、ささやかだけど家庭的な温かい結婚式。でも、相手が須崎グループの御曹司ともなれば、『ささやか』な式は挙げられそうもない……

私がSUZAKI商事を取り仕切る須崎グループの御曹司である輝翔さんと出会ったのは十年前のこと。私の父が須崎グループの顧問弁護士をしているのが縁で、輝翔さんと私の兄は学生時代からの親友なのだ。そして、ある日ひょっこりうちに遊びに来た輝翔さんに、私はすっかり魅了されてしまった。容姿端麗、頭脳明晰、おまけにセレブという王子様のような彼に、初心な中学生だっ

た私がときめかないはずがない。

——まさかその時、輝翔さんも私に対して恋愛感情を抱いてくれたとは知らなかったけど。

そして時は流れ……なんの進展もなかった私たちの関係が変わったのは、去年の私の誕生日。突然、輝翔さんから結婚前提のお付き合いを申し込まれたことを皮切りに、輝翔さんのお母様によって秘書課に転属命令が出され、家督を巡る問題で輝翔さんに結婚を迫っていた女王様こと百合子さんの出現から始まるお家騒動を乗り越えて……無事？ 輝翔さんからのプロポーズを受け、私は正式に彼の婚約者となった。

どうよ、この怒涛の成り上がりストーリーは？

以来、結婚の話をも具体的に進めようとする輝翔さんと、なんとかそれをかわそうとする私の攻防が続いている。

「でも、結婚式が小規模だと、その後の挨拶回りとか顔見せとかが面倒になるよ？ 披露宴で一気に済ませてしまったほうが、楽だと思うんだけど」

「それはそうかもしれませんが、セレブな式なんて私には無理です」

どこにいてもなにを着ても絵になる容姿の輝翔さんはいいでしようよ。だけど、輝翔さんの隣で身の丈に合わないような、とんでもなく長いヴェールを引きずって歩く私の姿なんて、考えただけでも恐ろしい。

私は長い間ずっと、自分は輝翔さんの相手として相応しくないと思っていた。父や兄は弁護士と

いう華やかな職業に就いているけど、私自身は地味な庶民派OLでしかない。でもジェットコースターのように急に訪れた、あれやこれやを乗り越えて、今ではその考えを改めた。そして、これから先も輝翔さんと一緒にいたいと強く思うようにはなったけど、それでも人間にはそれぞれ適材適所というものがあるはずだ。

——晒し者になるのだけは、まっぴらご免なの！

「別に長いヴェールを引きずらなくてもいいじゃん。沙紀みたいなミニスカドレスだってあるんだから」

輝翔さんの視線の先には、長くて細い足を大胆に露出した花嫁姿の沙紀さんがいる。彼女は友人たちに囲まれて記念撮影をしていた。

確かに、あの大人しそうな沙紀さんが、こういうドレスをチョイスするとは、意外だった。

外見は清楚で可愛らしい印象の義姉だから、定番のプリンセスラインとかマーメイドラインとかのウエディングドレスが似合いそうだし、そういうのを着るものだと思っていた。だから私は控室でのお披露目の時に度肝を抜かれたのだ。すると、私にこっそり近寄った沙紀さんが耳元でささやいた。

『……こういうギャップに、悠一さんは弱いなの？』

ふふふっと黒い笑みを浮かべた沙紀さんを思い出し、私は小さく溜め息を吐いた。

兄の好みはさておき、弁護士という割とお堅い職業の妻になるのだから、ちゃんとしなきゃと気負ってしまうこともあるだろう。それでも、自分の意見を貫き通した沙紀さんには尊敬の念しか

ない。

……私もきちんと自分の考えを持てるようになりたい。

ミニスカドレスが着たいわけじゃない。でも、結婚式の主役は花嫁さんだし、その日くらいは自分の理想通りの衣装を着て、希望に沿った規模のものにしたいと思う。

いや、その前に、『その日』自体も、ちゃんと自分で決めたいじゃない？

「輝翔さんは、私が人前で大胆露出してもいいんですね？」

「いや、それはダメ」

独占欲の強い輝翔さんのことだから、そう言うと思いました。

私だって、あのドレスを着る勇氣はない。……自信ないもん。

「ミニスカートは困るけど、綺麗で可愛い花嫁をみんなに見てもらいたいとは思うよ？」

輝翔さんの攻撃はなおも続く。

イケメン御曹司に熱烈に結婚を迫られるなんて、乙女ゲームの世界みたいで身に余る光栄だとは思うけど、いい加減ウザい。

「私は、輝翔さんに見てもらえるだけいいです」

私だって、いつまでも振り回されているわけではないもんね。

輝翔さんは私たちの結婚式について、近々予定のある決定事項のように話しているけれど、具体的なことを約束しているわけではない。正直、私にはまだ実感なんてないのだ。

結婚式の内容もさることながら、結婚前に解決すべき問題だってあるし、やらなければいけない

こともある。それらを全部片付けるまで、私たちの戦いはしばらく続くことだろう。

「どうせいつかするんだから、時間稼ぎしなくてもいいのに」

ポツリと呟いた言葉だって、聞き逃したりしませんよ？

「あんまりしつこかったら、結婚する気がなくなるかもしれませんけどね」

にっこりと微笑みかけると、輝翔さんはようやく黙った。

結婚式を迎えたカップルにも、その日までにいろいろな出来事があったに違いない。それに、結婚がゴールというわけでもない。二人が添い遂げるためには、その後も試練に見舞われるだろう。

それに、私が輝翔さんからプロポーズされたのは、全裸で攻められている時。そんなの、はっきり言って脅迫じゃないか！ 焦らされるのがもどかしくて『いつか』ということでプロポーズを受けると返事したけど……できることなら、あのプロポーズだけはやり直してもらいたい。手の込んだサプライズ的な演出でなくていいから、せめてもう少しロマンティックなものがあった。

だから、自分が納得できる時まで、本当の返事は待ってもらおう。

「今さらなかったことにされるなんて、それは困るな」

誰に聞かせるでもなくそう呟いた輝翔さんは、突然スタスタと歩き出し、大勢の人に囲まれる新郎新婦に近づいていった。そして、彼女の耳元でなにやらごによごによと話をする。沙紀さんの黒い笑みと、兄の微妙な表情に、嫌な予感しかしてこない。

しばらくすると、輝翔さんは沙紀さんの手から真っ白いブーケの束を受け取った。

——ああ、やっぱり予感的中だ……

やわらかな春の陽射しのなか、絵本から抜け出してきたような王子様が花束を手にこちらへと近づいてくる。

やがて私の前まで進み、スーツが汚れることも厭わず、その場に跪いた。  
差し出されたブーケは、次の花嫁になるための切符。

「ずっと前から君のことが好きだった。俺と、結婚してください」  
そりゃ、やり直してもらいたいとは思ったけどさ……

突然の公開プロポーズに、周囲の視線が私たちに一気に集まる。本日の主役であるはずの花嫁も観客となり、期待に満ちた表情でこちらを見つめている。私の父と兄は参ったとでも言いたげに頭を抱え、母は呑気にシャンパンを呑み干していた。

これは、前回ベッドの上で受けたプロポーズ以上に追いつめられてる気が……  
熱っぽく私を見上げる輝翔さんの瞳には、甘さと黒さが入り混じっていた。

——この、確信犯め！

「……よろしくお願ひします」

そっと受け取ると、輝翔さんは嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。

ずっと懂っていた王子様は、予想外に意地悪で嫉妬深くて独占欲も強い腹黒王子だった。  
だけど、どんなに強引な手段を使われたとしても、私がこの人を嫌いになることだけはな

知らなかった輝翔さんを知るたびに、私は何度だって恋をする——

——晴れのよき日に。

祝福の声に包まれながら、輝翔さんは私の身体を高々と抱き上げた。

## 1 同棲、始めます

「さて、始めますか」

薄手のカットソーとジーンズに身を包んだ私は、腕まくりをしながら目の前の荷物に向かって宣言をした。

まとまった休みの取れた、とある日。輝翔さんとの同棲に向け、今日は自分のアパートの片付け作業に取り掛かることにした。明日はいよいよ引っ越しの日だ。

輝翔さんとの同棲を了承したのが二月のこと。なぜ今日まで二ヶ月も先延ばしになっていたのかといえば、それにはちょっとした理由がある。

輝翔さんは、プロポーズの返事を聞くとすぐ、恐ろしいスピードで引っ越しの手続きをしようと

した。

それに『ちよつと待ったー!』と手を挙げたのは、もちろん私。

二ヶ月前の、ある日の休日。輝翔さんのマンションのリビングでくつろいでいた時に、この話になった。

『……どうして?』

そう言った輝翔さんはジト目になっていた。きつと心の中で、『なんだよ美月、ノリ悪いな』と悪態をついていたに違いない。

『返事をした昨日の今日で引越しは、さすがに早過ぎやしませんか?』

輝翔さんと一緒に住むな

ら、うちの両親に報告をして、ちゃんと承諾を得ておきたいんです』

『悠介先生からの許可はもらってるけど?』

『それは輝翔さんが勝手にうちのお父さんに……』

あ、また。なんでそんなに睨むんですか。

輝翔さんから同棲の申し出を受けたのはもうかなり前のことで、抜かりのない王子様はその日のうちに私の父に電話をしていた。その後、家に帰った私は父に『他にいい男もいないんだから大人しく輝翔くんにしておけ』的な発言をされてヘソを曲げ……現在に至る。

『これはケジメなんです。私ももう大人だし、そういうことは自分の口からきちんと言明したいんですよ。この期に及んでやつぱりやめた、なんて言いませんから』

一緒に暮らすと決めたのは私自身だから、今さら嫌だと言うつもりはない。

輝翔さんとの交際について、なぜかすでにお互いの両親は容認している。それでも、嫁入り前と同棲するんだから、事前にきちんと話しておくべきだと思う。

『それに、ですね。一緒に暮らす前に、やらなきゃいけないことはまだあるじゃないですか』

輝翔さんの隣に座っていた私は立ち上がり、寝室の横の扉を開く。滅多に開けられることのないその部屋は、段ボールの山だらけ。

この状況で、私はどこに住むと言うのさ!?

『私の荷物を運び込むには、まずはこの部屋をなんとかしないと!』

輝翔さんの部屋はマンションの最上階にあるペントハウスで、一応2LDKという間取り。だが、リビングと寝室はともかくこの部屋は、完全なる倉庫と化していた。

この物置き部屋は、私が今住んでいる1DKのアパートよりも遥かに広い。でも、私のベッドやらタンスやらコタツやらを運び込もうにも、寸分の隙間もない状況だからどうしようもない。

『……美月の部屋の家具を持つてくる必要はないだろう? 全部処分して、衣類とか化粧品とかだけ持つてくればいいじゃん』

『なんてことを言うんですか!』

これだからセレブは困る。私の部屋の家具は就職を機に一人暮らしをすることになってから購入したものと、実家で愛用していたものとで構成されている。どれも思い入れのあるものばかりだ。特にコタツ、あれだけは絶対に手放したくない。

ハイセンスな輝翔さんの部屋は、床暖房完備で足元あったかである。だけど、置の国で育った私

は、冬は赤外線の灯を浴びないと嫌なんだってば。それに、まだまだ使えるのに処分するなんて、もったいないったらありゃしない！」

『ものを大切にできない人は他人にも優しくできないんですよ！ 私の部屋のものは絶対に捨てません！ 持ってきちゃダメというなら、同棲の話はなかったことにしてください！』

腰に手を当てながらビシッと指をさすと、さすがに輝翔さんも諦あきらめてくれたようだ。観念したように下を向く様子を見て、心の中でよっしゃ、とガッツポーズした。

いくら一緒に暮らすとはいえ、自分だけのプライベート空間が欲しいじゃない？ 私だって、たまには一人でぐっすり眠りたい時もある。毎夜毎夜、輝翔さんに付き合っていたら、身がもたんわだから、コタツとベッドだけは、絶対死守するぞー！

『……わかったよ。片付ければいいんだろ。美月も手伝ってくれる？』

『それは、もちろん』

——汚おへや部屋の住人の輝翔さん一人でできるとは、これっぽっちも思っていないから。

そういうやり取りがあって、私の引越しは延び延びになっていた。途中、輝翔さんが痺しびれを切らして『どうせ片付けるなら、もっと広いところに引越す！』とかセレブ発言をし始めたけど、なんとか説得。そして仕事の合間に倉庫部屋にあった段ボールの山をせっせと整理して、私のもを運び込む部屋がその姿を現すこととなったのは、三月ももう終わりを迎える頃だった。

その間に兄の結婚式は終わり、新婚旅行からも無事に帰国した。私が暮らしていたアパートの荷

物はさほど量がなかったたので、明日は兄がレンタカーのトラックで運び出しを手伝ってくれることになっている。輝翔さんの部屋に持って行かない荷物は、実家に置いてもらうことにしていた。

あ、両親への報告ですか？ それはもう、アツサリサツパリと終わりましたよ。なんだ今さら、みたいな顔した父に舌打ちされた時には、腹が立ちましたけど。

なにはともあれ、今日中に梱包くわんぱう作業と掃除は終わらせないといけない。

早速取り掛かろうとすると、インターホンが来客を告つげた。

郵便か、宅配便か、はたまた作業を手伝いに来てくれた母か……急いでドアを開けると、そこには、戦力にならない人が立っていた。

「やあ、美月。手伝いに来たよ」

今日は一日作業に徹するから会えないと言っておいたのに……

「——輝翔さん」

あなたがいると、片付かないんだってば！

「段ボールに荷物を詰めるくらいは俺にだってできるよ」

がっくりと肩を落とした私に、輝翔さんはクスクスと笑いかける。今日の彼は、グレーのカットソーにジーンズという軽装だ。

そうですね、段ボールは得意ですよ。だって輝翔さんの部屋の荷物は、つい最近まで、大半が段ボールの中を居場所としていましたからね。

「じゃあ、本の梱包くわんぱうをお願いしてもいいですか？」

泣々お願いと、輝翔さんはオツケーと軽く言つて本棚の前に座り込み、作業を始めた。

まあ、本を詰めるくらいなら片付けが極度に苦手な彼にだってできるだろう。リビングの本棚は輝翔さんに任せて、私はひとまず台所の整理に取り掛かる。

輝翔さんの部屋の調理器具は足りないものも多いので、うちで使っているものはすべて持つて行くつもりだ。お皿とかマグカップとか、一人暮らし用にひとつずつしかないものもあるけど、輝翔さんがいない時の食事に使えるので、新聞紙に包んで割れないようにきちんとしまった。

シンクやガス台なんかも綺麗にすること約一時間。台所での作業を終えてリビングに戻ると、輝翔さんは、まだ本棚の前に座り込んでいた。

「……なにしてるんですか？」

背後から覗き込むと、輝翔さんの手は私のアルバムを開いている。

「んー。つい見ちゃつてさ」

はい、出た。片付けの途中でうっかり本とかアルバムとか見ちゃつて、ちつとも作業が進まないあるある……つて、人が働いてる間ににしとんのじゃあ！

「いや、美月の子供の頃の写真つて見たことなかったから興味があつて」

輝翔さんが見ているのは、私が幼稚園とか小学校の頃の写真だ。

「俺たちが知り合つたのは美月が中学生の時だったから、この頃のことは知らないだろう？」

可愛いなあ、なんてお世辞を吹きながら、熱心に見ていきますけどね？ 輝翔さんが、私の子供の時の写真なんか見てたりすると、またもあの疑惑が頭をかすめるといいますか……あ、また睨ま

れた。

だってさ、輝翔さんには幼女趣味疑惑が……！

「……つたく、美月の頭の中が透けて見えるようだよ。俺はただ、俺たちに娘が生まれたらこんな感じかなつて想像してただけだ」

「む、娘!？」

そつちのほうが生々しいじゃないか！

まだ結婚もしてないうちに、二人の間に生まれた子供のことを考えると、気が早すぎますつて。

「俺は一人っ子だったから、絶対に二人以上は欲しいな」

「そういえば、輝翔さんもお母様も百合子さんも一人っ子ですよね」

みんなきょうだいがいないのには、なにか理由があるのだろうか。

なんとなく思い浮かんだ共通点を口にする、輝翔さんはこう答えた。

「ああ……母親の場合は、じいさんたちの件があつたからだろう。下手に兄弟がいると跡目争いなんかに発展して、いろいろと面倒だからね。俺が一人っ子なのも、詳しく聞いたことはないけど、多分そうじゃないかな？ 単に仕事が忙しかつたつていうのもあるかもしれないけど」

「そう、ですか……」

輝翔さんのおじいさんの件というのは、例の、百合子さんの家とのことだ。

本来家を継ぐはずだった長男と、次男との間に起きた世襲問題。次男で、つまり分家である輝翔さんのおじいさんが須崎グループを継いだことに端を発する。その問題は子供の代にまで引き継が

れ……そして百合さんと輝翔さんにもつきまどっていた。百合さんのお父さんは、輝翔さんと自分の娘を結婚させて、もう一度自分の家を権力の中枢に座らせようと画策したのだ。今となっては、その目論見も失敗に終わったけれど。

輝翔さんが子供を二人以上欲しいと思っても、やっぱりその後のことを考えたら、慎重になったほうがいいんじゃないかな。

ところで、生まれた時からこんな大企業である須崎グループの後継者ってどういう気持ちなんだろう。子供にはそれぞれ生まれ持った資質や可能性があるのに、将来の仕事が決まってるってことだよな。意に沿わなかったらグレちゃったりしないかな。

そもそも輝翔さんは、今の自分に満足してるのかな……？

「輝翔さんの子供の夢はなんですか？」

「夢、ねえ。んー、パイロットとかには憧れてたかな」

パイロット……！ ああ、なんて子供らしくて素敵な夢！ それに、飛行機の機長の制服を着た輝翔さんとか、想像するだけで萌える！

「でも、社長になるんだって漠然と思ってたから、そんなに執着しなかったけどね」

「そうですか……」

やっぱり、自然と諦めざるをえないと悟ってしまうものなのね。歌舞伎役者の家の子とか、すごいなって思うんだ。

だが、そんな心配をする前に、ちゃんと跡取りを産めなかつたらどうしよう。よく、梨園の妻は

男の子を産めなかつたらご鬢筋にネチネチ嫌味を言われるとか聞くじゃん！

「男の子、産まない……」

ぼつりと口をついて出た言葉に、輝翔さんもまた何気なく反応する。

「そう？ 俺は娘がいいな」

「でも、跡取りといえば男の子でしょう？」

「うちの母親は女でも跡取りになったよ。だからそこは気にしなくても大丈夫」

そう言われれば、そうでした。輝翔さんのお母様は、狸オヤジみたいな並み居る敵を寄せ付けずにその座におられる方でした。

でも、お母様ほどの才覚のある女傑もなかなかいないと思う。私のDNAが受け継がれた子供が、社長の資質を持って生まれてくるのか？

輝翔さんのいいところをまるで受け継がずに、私そっくりの子供が生まれちゃったらどうすればいいの!?

——って、私の考えも飛躍しちゃってるし！

まだ結婚すらしてないのに、なにを馬鹿なこと考えてるんだ、私。

「男でもいいけど、最初は美月に似た可愛い娘がいいな。男の子だと、美月を巡って争いが起きそうじゃん？」

なにその、私を巡っての争いって。自分の息子にまで嫉妬するとか、どんだけ心が狭いんだ。

「……そんなの、娘だったら、輝翔さんを巡って私が争わなきゃいけないんじゃないですか」

「それは大丈夫。子供は世界で二番目に好きな人で、一番は美月だから」  
真面目な顔して赤面するようなセリフは勘弁してください。

「そ…そんなの、わからないじゃないですか」

世の中には、子供を産んだ途端に妻を母としか思えなくなる男性もいるというし。まだ生まれてもない状態で二番目に好き発言は、無効だ。

「俺は美月が変わっていくのも楽しみなんだ。だから、心配しなくていいよ」  
ふわりと笑う輝翔さんは素敵すぎて直視できず、思わず俯いてしまった。

本当に、私にはもつたないくらいの人だ。輝翔さんに「しておけ」なんて父は言ったけど、我が身には贅沢すぎる選択というもの。

これから先、他の誰と出会っても、輝翔さん以上の男性などいないだろう。

いつか。輝翔さんと、私と、娘と息子。家族四人で仲良く暮らせる日がきたら、それはきっと、すごく幸せ。

私は他の誰にも満足できない。

私には、輝翔さんしかいないのだから。

そんなおめでたいことを考えていると、輝翔さんから横槍が入った。

「ま、少々気が早いけどね」

——だから、それを、あんたが言うなあ！

「あ、この頃からはもう知ってる」

人の妄想を煽るだけ煽ってさっさと現実に戻った輝翔さんは、なおもアルバムのページを捲る。

次のページには、中学校の制服に身を包んだ私が出た。

「幼いですね……」

写真の私は、入学式の看板をバックにブカブカのセーラー服姿で緊張した顔のまま正面を向いている。今よりもさらに丸い顔にパツツン前髪とか、子供感満載だ。

こんな幼い私に、輝翔さんはよく恋してくれたもんだ。

輝翔さんは出会った頃から私に惹かれていたらしいんだけど、この当時の自分のどこにそんな要素があったのか皆目見当がつかない。

やはり、ロリか…？ って、なんだか隣から、ただならぬ冷気を感じるぞ。

「ぶっちゃけ、美月だっこの頃すでに俺のこと好きだったよね？」

——ぎゃあっ！ 冷気のついでに攻撃された！

中学入学直後のある日、家に訪ねてきた兄の友人を一目見て、心を奪われたのは事実だ。でも、自分には手の届かない存在であると知っていたから、私は自分の恋心に蓋をした。

「入学した時はこんなに幼かったのに、少しずつ成長して女性らしくなっているよね？ ずっと隣にいて、美月が変化していくのを見るのも楽しかったんだ」

パラパラとアルバムのページを捲りながら、輝翔さんは懐かしそうに目を細める。

…私的には、さほど大人っぽくはなっていないと思うんですけどね？

「輝翔さんは私に対して、全然そんな素振りを見せてくれなかったですよね？」

『少しでも、女らしく』。それが当時の私のスローガンだった。

憧れの先輩に家庭教師になってもらって、同じ高校に入るために勉強を頑張っていたけれど、毎週部屋にやって来る先輩を迎えるための努力も怠らなかつた。部屋の掃除をして、いい匂いのする芳香剤を置いて、身支度だつてきちんと整えた。

なのに輝翔さんは、髪を切つてもなにも言つてくれないし、友人に勧められたメイクをしても無反応だし……。自分の女子力はそんなに低いのかと落ち込んだくらいだ。

「それは、ほら……俺もまだ若かつたし……髪を切つたこともいい匂いがしていることもわかつてたけど、あえて触れないようにしていたんだよ。いろいろ自制してないとヤバかつたし」

あら、やだ。耳が赤くなつちやつた。

顔を背けてぼそぼそと呟いてますけどね。自制つて、こんな子供相手になを制御してたんですか。やつぱりロリ……つて、ああ、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！

「なにより、この頃の美月は俺に対して一歩引いてたしね。変なことをして嫌われないようにするので精一杯だつたんだよ」

変なことつて、子供相手になを……つて、すいません、ほんと、すいません！

確かに、この頃の私は矛盾に満ちていた。嫌われないように必死だつたくせに、その一方では、憧れを飛び越して一歩踏み出してしまわないようにと距離を取っていた。

そうしていれば、私と輝翔さんの関係は、高校生になつて家庭教師をしてもらう必要がなくなつ

た後も長く続くと思っていたから……

続くページには、高校のブレザー姿の私がいる。

「本当は、制服姿の美月と学校帰りにデートなんてのもしてみたかつたな。クレープ食べたり、映画観たり、カラオケ行つたりのベタなやつ」

輝翔さんの願望は、割と健全だつた。

でも、万が一お付き合いを申し込まれていたとしても、きつと私は断っていた。

この時すでに輝翔さんは大学生。高校生だつた私には、大学生は大人のような存在で、元々あつた二人の身分の差も相まって大きな隔たりを感じていたから。恋愛に強い興味はあつても、自分よりも大人な存在の輝翔さんとうとうこうなりたいたいなんて、おこがましくて到底考えてもいなかった。

それに、いつかはお別れしてしまう可能性のある恋人よりも、いつまでもずっと傍にいられる後輩のポジションのほうがいいと、思っていたんだ。

今の状況は、長い年月をかけたからこそ受け入れられたところも大きい。

輝翔さんのお付き合いはまだまだ夢物語みたいだけど、いつかは、胸を張っていられる自分になりたい。

とにかく今は、それより他にやるべきことがあるんだよねえ……

「輝翔さん、そろそろ仕事に移つてもらえませんか？」

いつまでもアルバムに見入っていたら、ちつとも引越し作業が進まないじゃないか！

「……ねえ、美月。この部屋のものは捨てずに全部持つていくんだっけ？」

「そうですね……ああ、でも、冷蔵庫とかは二つもいらなくて、ひとまず実家に運びますけど」  
まだまだやることは山積みだ。それなのに、輝翔さんは相変わらずアルバムに視線を落としたりま  
ま動こうとしない。手伝う気がないんだったら、せめてその場所だけでも譲って欲しい。

「だったら、この写真も持っていくんだね？」  
そう言っただけで目の前に突き付けられたのは……

——げえええっ！ 元カレとの、ツーショット写真！

しまった。就職してからいろいろと忙しかったから、アルバム整理のことなんてすっかり忘れて  
た！

元カレとは、就職を機にフワッと別れてしまったものだから感慨もあまりなく、処分するのさえ  
忘れていた。

同じゼミだった元カレと一緒に写った写真は多い。グループ写真もあれば、お互いに頬をくっつ  
けてピースサインなんかしているツーショットもある。輝翔さんが手にしているのなんかは、まさ  
に後者だ……

ああ、部屋の温度が急激に下がった気がする！ なのに輝翔さんの背後には、なんか黒い炎みた  
いのが見える！ これはもう、お怒りMAXだ！

「すすす捨てます、処分します、持っていきません！ ってゆーか、輝翔さんが勝手にアルバムな  
んか見るから、こんなものを見つけないことになったんでしょ!?」

そうだ、元はといえば輝翔さんが作業をサボってそんなもの見てるから悪いんじゃない！ 私に

罪はない、冤罪だ、プライバシーの侵害だ！

「へえ、捨てちゃうの？ 大事にとっておいたものなのに？ ものを大事にしない人は他人に優し  
くできないのには？」

わああ……顔は笑ってるけど、内心では絶対怒ってる！

「大事になんてしてませんよ!? そこにあるのもすっかり忘れてましたよ!? 今は写真よりも輝翔  
さんのほうが大事ですから！」

なんで元カレとの写真でここまでうるたえなきやならないんだ、とは思いつつも、目の前の輝翔  
さんに圧倒されて咄嗟に逃げ出そうとした。

——が、あっさり手首を掴まれて、床に押し倒される。

ゆ……床ドン！

「じゃあ、どれくらい俺を大事にしてるか、証明してくれる？」

覆いかぶさる輝翔さんは、怒りのオーラを漂わせながら、なおもニッコリと微笑んだ。

この状況で、なにを、どうやって証明しろと!?

このままだとピンクな展開に発展してしまいそうだけど、今はそんなことをしている場合じゃな  
いの。でも、輝翔さんのお怒りを鎮めなければ、引越し作業を再開することはできそうにない。

ああ、でも、なにをどうすれば……!?

「——プツ」

混乱も最高潮を迎えた時、突然輝翔さんが嘔き出した。

私の真上にあつたはずの顔は背けられて表情は見えないが、微かに震えている様子から笑いを堪えているのがわかる。

「輝翔さん……」

これは、もしかしなくとも、完全にかかわられていただけの模様です。

「ごめ……、美月がうるたえるのが面白くつてさ」

「もう！ ふざけないでくださいよ！」

それに、私の過去を責めるのであれば、輝翔さんの過去だって褒められたものじゃない。中学生の頃の輝翔さんが好き放題遊んでいたのに比べれば、私なんて純粹で可愛いものだ。

「ほら、早くどいてください。まだやらなきゃいけないことがあるんだから」

輝翔さんの肩をぐつと押して起き上がろうとすると、なぜか、輝翔さんの身体がそのままドサリと落ちてきた。

「あ、輝翔さん？」

「いや、まあ、ちよつと……羨ましかったんだ。俺たちが一緒に写った写真とかないから」

……言われてみれば、そうですね。

輝翔さんとお出かけすることはあつても、写真を撮るなんて考えはすっかり抜けていた。

まさか、元カレとの写真を見つけた輝翔さんがそんなことを思うとは想像もしていなかったけど。

こんなことなら、前に遊園地に行った時にでも写真を撮ればよかつたな。

「今度、どこにお出かけた時には、一緒に写真を撮りましょうね。プリクラでもいいですし」

「プリクラは撮ったことないな。スマホとか手帳とかに貼りまくってもいい？」

「それはやめてください」

仕事で使うものには貼らないで。取引先の目が気になって仕方なくなるから。

「……写真はいいけど、この部屋には俺たちの思い出が詰まってるよね」

「そうですね。一緒にお鍋とかしましたもんね」

どういうわけか、輝翔さんは狭くて庶民的なこの部屋が気に入ったらしく、何度も訪れていた。

この部屋は、二人にとつての思い出の場所でもある。

「これからもつと、思い出を増やしていきますよね」

これから先はずつと、輝翔さんと一緒に。

写真に残していなくとも、二人で過ごした時間は、私の永遠の宝物。

輝翔さんは身体を起こし、そつと私の唇に口づけする。私も目を閉じて、それを受け入れる。

やわらかくて温かくてほのかに甘い唇が、啄むように何度もキスを落とす。やがてびったり重なり合つて——つて、長くないか……？

「あ、き……んつ、んんつ」

いくらなんでも輝翔さんの身体を押し返すが、唇は一向に離れる気配がない。それどころか、閉じた扉をノックするように舌先で私の唇をつついてくる。そして抗議の声を上げようと口を開けた際に侵入し、口腔内を蹂躪し始めた。

これは、マズイ展開です……！！

その間にも輝翔さんの舌は歯列をなぞり、奥に留まっていた私の舌にたどり着くと、表面を舐めた。逃げようとしたところをあつさりとお捕まり、ゆっくりと絡みつかれる。くちゅくちゅとお互いの唾液が混ざり合う音が淫らに響く。

「せつかくだから、最後の思い出、作ろうか……？」

唾液で濡れた唇を舐めながら、輝翔さんは妖艶に微笑んだ。

——ああ、やつぱり、こうなるの!?

「ちよつ、ちよつと待ってえ……!」

輝翔さんの瞳に明らかな欲情の証を見つけると、私は素早く身を翻した。

ちよつと待ってで待ってくれるほど甘い人ではないことも、こういう状況になってしまってから逃げられた例がないことも承知している。でも、今日ばかりは逃げなければならぬ。

——引越しの準備、まだ全然終わっていないから!

うつぶせになった私は、腹這いのまま前に進む。いわゆる匍匐前進というやつ。

なんとか半身だけ彼の身体の下から抜け出した時、輝翔さんは背後から私のジーンズのボタンに手をかけ、なんとショーツと一緒に引きずりおろした。

「ぎゃあああ!」

なんとも色気のない悲鳴を上げたことは許してもらいたい。

だって、半身抜け出したということは、輝翔さんの目の前で……お尻、丸出し!!!

裸なんてもう何度も見られていますよ? でも、だからといって慣れるものでもないんだってば!

しかも、お尻を晒すなんてとんでもない!

咄嗟に身体を横にしたものの、そうすると当然前が見えてしまうわけで。

この場合、前とうしろ、どっちを隠せばいいの!?

両手を使って隠すこともできるが、宴会芸じゃあるまいし、うら若き乙女が手で股間を押さえる姿ってどうよ? しかもそれを好きな人に見られるなんて、恥ずかしすぎる。

白昼堂々下半身丸出して、私は痴女か!?

そんな状況に陥らせたのは、他でもなく目の前にいる好きな人のだけけれど。

パニックを起こしている間に、輝翔さんは私の足に引っかかっていたショーツとジーンズをあつという間に抜き取ってしまう。

——前から思っていたけど、輝翔さんってエロに関してのみ器用ですよね!?

私は、たいして長くもないカットソーの裾をできるだけ伸ばし、ぎゅつと身を縮めて恨みがましく輝翔さんを見上げる。すると彼は抜き取ったジーンズを手にながら、それはもう、極悪な笑みを浮かべて見下ろしていた。

「なにするんですかあ! こんなことしてる時間はないんですつてば!」

まだリビングの片付けは終わっていないし、お風呂掃除もトイレ掃除も残ってるの。明日には荷物の受け取りに兄がやって来るから、それまでに終わらせなきゃいけないんだよお!

ジーンズに向かって必死に手を伸ばすが、無情にも私のショーツ付きジーンズはぼいっと部屋の

隅へ放り投げられる。

「だから、最後の思い出作りだって。この部屋でやれるのも今日で最後なんだから」

うわぁーん、いいとこの坊ちゃんのくせに、ヤるとか言うなあ！

「ヤ……やるなら夜にしてくださいよ！」

股間……いや、乙女の花園を守る私の手を引き剥がそうとする輝翔さんに抗いながら、つられて下品な発言をしてしまう。

私だって、あれだけ濃厚なキスをされれば、少しは……ムラムラと、期待してしまうさ。だからエッチが嫌なわけじゃない。時間と場所を選んでほしいだけで……

なのに輝翔さんはあっけなく最後の砦を取っ払うと、至極真面目な顔をして首を横に振った。

「無理。こんなの目の前で見せられたら、もう限界」

誰のせいだ！

必死の抵抗も空しく、輝翔さんは私の両太腿を自分の肩へと持ち上げた。

隠れていた場所が輝翔さんの目の前に晒され、恥ずかしさで顔が燃えるように熱くなる。私は思わず両手で顔を覆う。

クスツと小さく笑った輝翔さんの顔の位置が、徐々に下がっていく。

「——あつ」

ふっ、と息を吹きかけられ、寒気に似たぞわぞわとした感覚が走り抜ける。途端に、まるでスイッチが入ったかのように、下腹部がきゅんと疼いた。指や、輝翔さん自身が挿し込まれるのは

違った感覚。

次の瞬間、電流のような痺れが全身を突き抜け、驚きで背中が大きく弓なりに反った。

閉じた割れ目を、生温かくて湿った舌がヌルリとなぞったのだ。

「い、や……っ、輝翔さ……、汚い、から……あ！」

足の間にある頭を引き剥がそうともがくけれど、輝翔さんは離れるどころかさらにびつたりと密着してしまった。

「大丈夫、美月の身体に汚いところなんてない。もういいから、素直に俺に抱かれて？」

喋ると同時に熱い吐息がかかり、ぞくりと肌が粟立つ。

輝翔さんのやわらかな舌が、閉じた花弁を丁寧に開かせるように丹念に秘裂を舐める。くすぐったさに似た感覚と、痺れるような快感に身体がくねり、持ち上げられたつま先が宙を掻いた。

「あつ、あつ、や……っ、はあ、ダメ……え……！」

こんなことをしている場合ではないのに。頭ではわかっていながらも、うねうねと焦らすような動きに次第に思考が囚われていく。

まだ陽も高いし、引越しの準備もしてないのに。ていうか、そもそもなんで、こんなことになっちゃったんだっけ……？

さっきまでの思い出話のどこに、エロエロ魔王の欲情スイッチを押す場面があったのだろう。強引にエロに持ち込むのはいつものことだとしても、性急すぎる。まるで、思い出そのものを輝翔さんの行為で上書きするように――

『——上書きしてあげるからね』

……そういうえば、前にもそんなことを言われたような。

呆けた頭で必死に考えている間にも、輝翔さんの唾液で満たされたところが徐々に潤いを帯びてきた。

舐められると同時に痺れが広がり、そしてその感覚が通り過ぎると濡れた肌がひやりと冷える。繰り返し与えられる刺激に身体の奥底から熱いものが込み上げてきた。蜜口に輝翔さんの舌が這い、ぴちゃぴちゃと淫靡な音を立て始める。

「は、あつ、ふ……うんっ」

恥ずかしさと気持ちよさが混ざり合い、目尻に涙が浮かんだ。いつの間にか私の手は、輝翔さんの頭を引き離すことよりも自分の喘ぎ声が漏れないようにするために使われている。

私の部屋は壁が薄い。いくら明日には引越すとはいえ、こんなの聞かれたら、立つ鳥跡を濁しまくりだよ。

なのに輝翔さんは、攻める手を緩めてくれない。抱えていた私の足から手を離し、カットソーの裾から胸元に向かってゆっくりと差し込んだ。

やや乱暴にブラをたくし上げ、膨らみをやわやわと揉みしだかれる。

「ふ……あつ、ん……、あつ、はあ、あ……っ、あつ」

口に当てていた手の中が、ぐぐもった吐息で満たされる。ただ胸を揉まれているだけなのに、頂が痛いくらいに主張し始めている。勃ち上がった乳首を、彼の指の腹で擦られるたびに甘い声が漏

れた。

何度となく抱かれたことで、私の身体はすっかり輝翔さん仕様に書き換えられている。

そればかりか、抱かれるたびに motto、 motto、と食欲に欲しがる自分がいる。

摘まれた乳首を彼に見せつけるように自分の背が自然ととなる。それに気付いた輝翔さんが指先に力を入れてカリカリと頂を引っ掻く。すると、快楽に悦んだ身体に呼応して蜜口からトロリと熱いものが零れ落ちた。

輝翔さんは両手で膨らみを弄びながら、舌ではとろけた蜜壺を貪り続ける。やわらかくざらりとしたものに内壁を擦られ、足の間で奏でている水音はその大きさを増していく。次々と溢れだす蜜と輝翔さんの唾液が混ざり合い、雫となって臀部を伝う。

「美月、気持ちいい？」

赤い舌をチロチロと動かしながら、輝翔さんが上目遣いに私を見る。

両手で口を塞いでいる私は、無言のままこくこくと頷いた。

恥じらいも焦りも、すっかりどこかへ消えてしまった。思考は奪われて、与えられる快楽に身を任せることしかできない。全身は熱に浮かされ、行き場のないもどかしさで腰が揺れる。

そんな私の様子に輝翔さんは満足そうな笑みを浮かべて、花卉の上の蕾に口づけを落とした。

「あつ！ ああ……、んあああ……っ」

強烈な刺激にまぶたの裏が白く瞬いた。輝翔さんはそのまま蕾を口に含むと強く吸い込み、硬く尖らせた舌の先端で捏ね上げる。快感がびりびりとした電流になって一気に全身を駆け巡り、手足

の先まで張りつめた。

「ああ……っ、あああああ——!!」

——身体が、宙に浮いた気がした。

はあはあと肩で息をしていると、輝翔さんはようやく私の足の足の間から頭を上げた。陽の光に照らされた輝翔さんの口元が輝いている。それを見て、消えていたはずの羞恥心がむくむくと蘇る。

私のアレ、舐めちゃったんだ……!

私は怠さの残る手を伸ばして彼の唇を指で拭う。すると、輝翔さんは不思議そうな顔をした。

「汚いじゃないですか……」

シャワーを浴びてないのに。

すると輝翔さんは大きな瞳をふっと細めた。

「美月の身体に汚いところなんてないって言ったのに」

そう言っつて、自分のジーンズのポケットから財布を取り出し、正方形の小さな包みを引き出す。

それを口に咥えて自分のベルトに手を掛けたのだが、一連の動作がなんとも艶めかしい。

そんな卑猥なものまで似合ってしまうとは、恐るべし……!

輝翔さんが毎回必ず避妊してくれるのはありがたい。でも、目の前で装着するところを見るのはやっぱり恥ずかしい。

戸惑う様子が伝わったのか、輝翔さんはゴムを咥えたままクスリと笑った。

それから口に咥えたまま封を切り、中身を取り出す。そしてなぜか、それを私の目の前に差し出した。

「——ん。どうぞ」

……はて? どうぞとは?

目の前の丸くて薄いピンク色のものと、輝翔さんを交互に見比べる。

わけがわからず固まっていたら、輝翔さんは私の手を握ってそれを持たせた。

「興味がありそうだし、今日は美月がつけて?」

「はああ……!?!」

大口を開けて素っ頓狂な声を上げてしまった。

これを私がつけると!?

つけるといつても、私にはこれを装着するような器官はありませんから。当然、輝翔さんのナニにアレしろというのわかるけども。

——そんなの、ムーリーっ!

いや、輝翔さん自身とも何度もご対面はしてるし、く……口でした経験あるけど。私が臆病なせいもあって、そう頻繁に行われてるものでもないんです。

完全に逃げ腰になっていたら、輝翔さんは斜め上を見ながら溜め息を吐いた。

なに、その、芝居がかかった落胆ふりは!?

「美月が嫌ならこのままでもいいよ。せめて結婚するまでは避妊をと思ってたけど、デキちゃえば

結婚の時期が早まるだろうし、それもいいかもね」

輝翔さんが腰をずいっと近付けてきたので、無意識に身体をうしろへ引いた。

「わかりました！ やります、やらせてください！」

——脅迫すんな、この、腹黒御曹司が！

心の中で悪態をつきながら素早く身を起すと、輝翔さんはちよつと残念そうにしながらも、ふたたび自分のベルトを外し始めた。しかし、つけろと言われても、触るのも初めてなんだけど。

なんだかとても薄いし、引っ張ったり引っ掻いたりしたら簡単に破れちゃったりするんじゃないだろうか。

「そのの、とんがった場所を持って」

輝翔さんは下半身剥き出しのまま、正面に正座する私に向かってご丁寧なレクチャーしてくれる。なんともシユールな状況ではあるが、自分のために必要な講義なので大人しく従う。

「空気が入ると途中で抜けちゃうから。そしたら、そのまま被せて」

被せる、ということは。チラリと視線を動かすと、目の前には輝翔さんの立派なナニが……ああっ！ 恥ずかしい！

でも、やらなきゃならんです。意を決して、空いている手でソレを包むと、手の中でピクリと小さく跳ねた。

赤黒くたぎった肉の塊にピンク色の帽子を被せる。うーん、可愛いような、可愛くないような。

「被せたら、そのまま下ろして……」

心なしか、説明する輝翔さんの声が掠れている。

言われた通り、陰茎に添って丸まったゴムをぐるぐると下ろしていく。子供の頃に着せ替え人形で遊んだことがあるけど、これほど緊張するお着替えは初めてだ。それに、こんなに締め付けが強いようなものを被せて、痛かったりしないのかな。

「……あの、痛くないですか？」

「ん、大丈夫」

「……薄いけど、破れたりしません？」

元々薄いゴムが押し広がつてさらに薄くなっていく。心配になって尋ねると、輝翔さんは小さくプツと噴き出した。

「大丈夫だから。根元までいったら、一旦持ち上げて、最後まで下ろして……ん、上出来」

緊張の初仕事を終えてほつと胸をなで下ろすと、身体がうしろに傾いた。

頭のうしろ側を手で覆われながらドサリと床に倒れ込む。すると輝翔さんが私の胸元に顔を埋めた。直にくっついた身体が小刻みに揺れていて——もしかしなくとも、笑ってます？

「あー、もう、美月、可愛い！」

輝翔さんは私の浅い胸の谷間にぐりぐりと顔を擦り寄せながら満面の笑みを浮かべていた。

なんだよ！ 初めてなんだから、ぎこちなくても仕方ないじゃんよ！

馬鹿にされた気がしてふてくされていたら、準備を整えた輝翔さん自身がぐつと押し当てられた。

「ゴムの締め付けよりも、美月のナカのほうがよっぽどキツイんだぞ。ゴムが薄いのは……それを

選んだ悠一に言ってる」

「なぜ、兄に？ いや、また兄ですか。」

しかし、そんなことを考えている余裕は瞬く間に奪われた。

溢れ出た蜜を塗り付けるように、先端がぐりぐりと入口を押し広げる。私のそこは輝翔さんを受け入れるのに十分な潤いを保っていた。

ぐぐつとナカを押し広げながら、熱いものが入り込む。徐々に圧迫感が強くなり、耳のうしろが引き攣るような衝動があり、思わず下っ腹に力を込める。すると、輝翔さんの手が優しくそこを撫でた。

「ああ……っ」

撫でられて力が抜けると同時に、一気に奥へと押し込まれた。

奥の奥まで輝翔さんでいっぱいになる。咄嗟に身をよじろうとしたら、輝翔さんの両手に頬を掴まれ固定されてしまった。

「あ、ああっ……や、やん……っ」

輝翔さんの腰がゆるゆると前後に動きだす。引き抜き、また埋め込まれ、そのたびに蜜が絡んで滑りがよくなっていく。内壁が擦れ、最奥を突かれる衝撃は、瞬く間に快楽へと変わる。輝翔さんの動きに合わせて私の口からは歓喜の声が溢れだした。

「美月、もう少し声抑えないと、隣に聞こえるぞ？」

「だって……え、あ、輝翔さんが……っ、あっ、はあ、ああっ」

抑えろ、というわりには輝翔さんの動きは一向に緩む気配がない。逆に身体の上のしかかってきて、今度は真上から突き刺すように大きく穿たれた。

「あああっ……ん、あ、はあ……っ」

堪えようにも、どうしても声が漏れてしまう。その上、一際感じる場所を重点的に攻められては、なすすべもない。

嬌声を塞ぐべく手の甲を口に押し当てたら、輝翔さんがそれを制した。

「……嘸まないで。美月の声も身体も、全部、俺のものだから。大事な身体に傷を付けちゃダメだ」

そう言った輝翔さんは、私の身体にびったりと覆いかぶさる。そして、輝翔さんの唇が、だらしなく開いたままの私の唇に重なった。

少し前に私の秘部を蹂躪していた舌が、ねっとり口腔を這い回る。私は、無我夢中で自分の舌を差し出して強く絡めた。

「ん、んんっ！ ……ん、うん……っ！」

輝翔さんの唇が私の喘ぐ声を吸い上げた。密着した彼の胸板に潰された私の胸が上下に揺れる。

奥の奥まで突き上げられる快感と荒い呼吸を繰り返したことによる酸素不足で、目の前が徐々に白み始めた。

輝翔さんに、身も心も翻弄される。だけどそれも悪くないな、なんて、熱で浮かされた頭でぼんやりと思った。

立ち読みサンプル  
はここまで

「——好きだよ、美月。なにもかも、全部、愛してる」  
キスの合間に、輝翔さんが余裕のない表情で愛をささやく。

「はあはあと荒い息を吐きながらも、輝翔さんは決してこの言葉を忘れない。そしていつも、それが私の最後の一押しとなる。」

「私も、好き……、輝翔さん……あああつ、ああああ——!!」

後を追いかけるように、私を抱く輝翔さんの手にも力が籠こもる。

「——っ、く……!!」

低い呻うなき声とともに、私のナカで輝翔さん自身が大きく脈打ち、薄い被膜越ほしに爆はぜた。

\*\*\*

翌日、兄とともに現れた沙紀さんは、玄関先で私の顔を見るなり悩ましげに息を吐いた。

「疲れた顔しちゃって。そんなに大変なら、もつと早く手伝いに来たのに」

お願いだから、やたらニヤニヤするのはヤメテ……!!

昨日は、荷造りを忘れて輝翔さんとコトに及んでしまったツケを払うため、ほぼ徹夜状態で作業するはめになった。

なんとか間に合ったものの、ボロボロの私に兄は苦笑いだし、沙紀さんは生温かい視線を送ってくるし。輝翔さんはなぜか、徹夜をものともせずに元気なんだけど!

「この部屋とは今日でお別れだね。思い残すこともないしね」

などとはざきながら、ニコニコ顔で私と元カレの写真を破り捨てています。

なにはともあれ、予定通りに兄の借りてきたトラックへと荷物を運び出す。

輝翔さんには来なくていいと言ったけど、この時ばかりは助かった。

さあ、輝翔さん。その有り余るパワーを今からの引越作業で、思う存分発揮してくださいね!

荷物を男性陣に任せて、私と沙紀さんは室内の掃除に取り掛かる。

「思ったより汚れてないわね。美月ちゃんたら、日頃から綺麗にしてるんだ。偉い」

雑巾しほを絞しぼりながら、沙紀さんは感心してくれた。

「掃除は、母の躰しほの賜物たまものですかね。なにしろ専業主婦だから、日頃からマメに家のことをする人なんだ」

今でこそ趣味狂いの母だけど、遊んでいる分だけ家のことはしつかりやっている。『外でお父さんが頑張って働いてくれるから私たちが生活できる』と、子供の頃からよく聞かされたものだ。

「そっかー。じゃあ私も嫁として認めてもらえるように頑張らなくちゃね」

「沙紀さんなら大丈夫ですよ。今だって、うまくいってるじゃないですか」

俗あだに言う嫁姑よめぢやう問題も、我が家は心配ないと思う。

沙紀さんは兄が仕事で不在の時でも実家に行って、家のことをしてくれている。母もすっかり沙紀さんに甘えていつものカルチャースクールに行ってしまうぐらいだから、きっと悪い印象